一八九〇年代から獨逸の總ての大學に入學を許すようになつた。而して統計によると女子の大學生徒數は男子の約二十分の一位しかない。……等の御話しあり、最後に我國の女子大學教育に就ては現今東大で行つてゐるやうな仕方でなしに、總てを男子と同等に取扱ふと云ふ原則の下に女子の入學を許しても毫も差支はない。一般論として云へば女子は男子よりも脊丈は低い、けれども中には男子と同等或はより以上なのもある。智力に於ても一般論としては男子よりも低きも中には男子と同等又は以上なものもある。此等男子と同等、又は以上なものを女だからと云つて入學を拒む理由は少しもない。

又中には女子に餘り勉强をさせると家庭を作らないとか、女としての務をせないとかと稱して批難する人があるかも知れぬが、獨逸の例に徵しても女子の大學教育を受くるものは男子の $\frac{1}{20}$ にしかならぬ。從て全國の婦人の幾萬分の一にしか當らない。幾萬人の婦人の内で一人や二人が女としての働をしなくとも大勢に關係はない。だから結局女子の大學入學を拒むの理由は少しもないといふ話であつた。

倫理學會例會

三月二日午後五時より學生集會所で、卒業生の豫餞を兼ねて開會、法學部宮本教授の刑罰の意義に關する講演があつた。藤井教授も出席せられた。

新著紹介

支那佛蹟踏査 古賢の跡へ

文學博士常盤大定著

此の書を手にするとき、吾々は一個の藝術品に對する崇高な感じと同じ感じをもつて覗ざるを得ないのである。實に本書は内容から論じても、外形から評しても、堂々たる眞の藝術味に溢るゝ、内的に吾々を悦ばしむる作品である。それは『藝術は極味である。それは作家の手によつて作られた各々の對象物に於ける藝術家のハートを反照してゐる。それは實に家及びその他の附屬物の上に投げられた人間の魂の微笑である。それは思想と感情とのチャームをもつて人に有用なる凡てを孕んでゐる。』――と云ふロダンの詞に隨つてゞある。故に亦、著者博士は一人の藝術家であらねば

ならぬ。『アーティストとは最も廣汎な意義に於て言ふならば、自分の作品に幸福愉悅を見出す人である』からである。此の三六六頁に達する尨大な書の到る處に著しく現はされた氣分は、著者博士の永い間の宿望大願の滿足された悅びと、頭に蓄へた想像的智識の體驗されし快感と、二三聖跡の發見に有頂天となつた輕い心に、旅の疲れと身の危險とを打忘れた快躍との閃きである。中に挿入された百數十枚の照相の如きも、多くは博士の手になつたものであることを想ひゞが、其の苦心のほどが察しられよう。

昨夏本書一度世に公にせらるゝや、各地の新聞雜誌の紹介欄を驚くほど賑はしたことは吾々の熟知してゐる所である。最近には『宗教研究』第四年第十五號の卷末に、村上・前田・宇井・高楠の諸博士並に池田・長井・島地・高桑等の諸氏の批評が要約轉載されて居るので、予は茲に本書を批評しやうとは思はぬ。その必要を認めぬと云ふより斯る僭越を愧ぢるからである。唯、讃嘆の詞を少し述べようと思ふ。

著者博士は大正九年の九月と云ふ、殘暑の厳しい裡に汗を拭き〳〵出發して翌年の一月と云ふ寒威凜烈の頃まで、百三日間、支那佛教聖蹟踏査のための旅にあつたのだ。その間の成績を、自ら奮得した許多の照相とが、此の立派な藝術品として表はされたのである。博士は元來、大乘佛教の精神に依つて東洋民族の融和結合を計りたいと云ふ大理想を懷かれてゐた。且つは、曇鸞・臨濟・天台・慧遠・法藏・居納等千古の高僧碩德の跡を踏んで、逝ける靈を喚び返さんとの願望も伸々强烈であつたので、之が動機となつて一大奮發をなすに到つたと云ふ。此の大願心と云ふものが凡ての人に取つて最も緊要である。法顯の場合だつて玄奘の時だつて決して平夷坦々たる尋常一樣の企圖ではなかつたのである。實に法の爲めには喪身失命を厭はないと云ふ願心が彼等を成功せしめたのであつた。今、博士も此等三藏に劣らぬ大理想を懷いてゐられた譯であるから、排日氣分や銀の相場や飢饉の噂ぐらゐが何の障碍と云ふほどに足らうか。果して彼の樣に短い間に力一杯自由に努力して多くの成果を齎らすことが出來たのである。著者博士の滿足は到底一册子の容易に竭す所ではなからうと信ずる。予も同じ樣な佛蹟調査巡拜の願望を多年懷抱してゐるが、未だ淺學薄德のもの、機緣熟せず、私かに博士の斯る成効を拜見する毎に、羨望に堪へない感がする。

著者が這回の旅行豫定では、朝鮮から支那に入つて歸路再び半島佛教の踏査に引き返へすつもりであつたやうだが、豫定通りにならなかつたのは失望させる。本書の内容は朝鮮記事から始まつてゐるが、殆んど實地を踏まずしてあれ丈けのことを興味深く語つて居るのであるから、若し支那に於ても同じやうに踏査される機會があつたら、どんなにか悲喚悽慨の涙を竭つて半島佛教の今昔を追憶さるゝことだらうかと思はるゝ。例之、平壤の永明寺の如きも、著者探訪の一部に豫定されてゐたやうであるが、あの歷史あり由緒ある堂々たる大本山として想像されて居る伽藍が、森と藪と岩との間に蹲つた一小堂のみにすぎない現狀を眼の當り發見したとき、何人か桑淚の變に一驚を喫しない者があらうか。哀れに殘つた八角石塔の破片の傍に、黑い乳房をむき出した白衣の鮮婦の三三が、時折香華を獻ぐる爲めに雜草を押し分る悲しい光

景を、予は博士に見せたいと思ふ。又、あの玄武門や箕子廟を訪れた後、浮碧樓か練光亭に停んで大同江を一眸の下に俯瞰し、『長城一面溶々水、大野東頭點々山』たる絶景を博士の輕妙な筆を借つて寫して貰ひ、日清役と天道教の關係にでも及んだら、どんなに美しい山水と物語りとが出來上らうかと期待される。

著者は又、房山その他の支那旅行で驢馬に乘つた初旅をしたと云ふ。驢馬は實に可愛いもので躰軀劣小の割に力は強く、ウヰーと云へば止り、ゥッゥッと叱すれば進むそうな。予も曾て朝鮮の田舍路で此の小馬に乘せられ、五時間位で、もう全く尻の皮を擦りむいた經驗を嘗めてゐるが、耳の傍に幾つかの小鈴を下げて、サラン〳〵チャラン〳〵と小跨に急ぐいちらしい光景は、今尙ほ眼に視る心地がする。印度では象を使ふに、バイトーと云へば止り、マレーと言へば進むそうなが、驢馬と象は躰に大小の差こそあれ、未開地の旅行には重寶此の上ない從順な動物だ。

又、閑人の多い北京の郊外では、籠の鳥を啼かして朝から晩まで聽き惚れて暮す冶郎が鮮くないそうなが、その位の暢氣さは朝鮮でも澤山ある。海金剛に近い三日浦の傳說を見給へ。小舟に圍はれた湖水の景に三日間も還ることを忘れた仙人があつたと云ふではないか。金剛山の谷には仙人が毎日群つて碁を圍むと云ふ磐が巖に刻んであるではないか。街の通りの地上に横臥する位は平氣で、京城の電車通りでも、白衣の男女老幼は皆、席一枚で寢轉んで夏を過してゐる。知らぬが佛とは能く言つた、誠に天下泰平だと氣の毒でならなかつた。

又、玄中寺に曇鸞道綽二師の跡を訪ねられて、旅行の本懷を遂げた所は、著者獨特の妙筆で實に有り難く感じられた。漸く石壁寺に入つて寺僧相手に語り乍ら、月下に阿彌陀經を諷誦し、法顯三藏が曾て靈鷲山に登つて『首楞嚴』を誦したと同じ感激で、二祖の嘗昔を追念したと云ふのは詩的だ。姉崎博士であつたか錫蘭の故寺で月下に巴利經文を讀む寺僧の聲に、すつかり仙境に遊ぶ心地になつたとか言ふが、之と同じ感激だ。近くは、關老大師方が佛陀伽耶の菩提樹下に到り、金剛寶座に禮拜して香を焚き、『大日本國傳法の遠孫精拙等、去年臘月志を發し、海に航し、波濤を踰ゆるもの五千餘哩、日を閱する三十餘日、西印度孟買に到達し、此より陸路二千餘里、山川を跋涉して風餐露宿、今伽耶に來至す。恭しく佛の正覺を成就し給へる大菩提樹下金剛法座の前に拜跪して敬白す。仰ぎ惟んみるに……』と表白し乍ら、塔を三匝して禮拜したときの感激も、亦同じであつたに違ひないと思ふ。博士が此處に宿つたのは恰も十月廿七日。親鸞上人の逮夜たることを念ひ、山寺の夢ならず梟の鳴くを聞いたそうな。その心は、

祖師の夜に異鄕の聖跡を來て見れば、
月下夢成らず梟を聞く。

殊に又、此寺の千佛閣には、唐代の鐵佛百二十七躰までも藏してあると言ふが、果して然りとすれば、洵に稀代の珍寶で、正に金剛山榆岾寺の五十三佛と共に、唐代佛像集藏の双璧と言はればなるまい。

又、泰山廟を嘆いては、『支那佛教に對する第一の活法は佛徒にとでも申してはどうか。實に氣持ちの好い、我を神祕の世界に引入れる感傷である。

先づ學問をさせるにある』と著者が道破したのは適評だ。否、必らずしも支那に限らず、半島佛教に於ても吾邦に於ても尙ほ且つ適評たることを吾々は衷心から悲しむものである。

彼の東洋の二大藝術と並稱せらるゝ龍門の石窟と雲岡の石佛寺とに對する探訪は、恐らく這回の旅行に於ける著者最上の所得であつたらうと思はるゝ。それ丈け又、異常の決心と勇氣と努力とを要してゐるのである。龍門の老君洞にも雲岡の第九窟にも、同じ北魏の太和七年(西暦、四八三)製作の銘記あることが發見されてゐるのは最も研究上興味ある點である。此等石窟の多くに附刻されたインスクリプションは著者も拓本として餘程欲しかつたようであるが、我が京都大學には、幸に松本博士の將來にかゝる全部の拓本が完備してゐる。支那の佛教美術資料としては無二の重寶だ。

次に博士が書中最も得意の筆を縱横に振つた所は廬山巡禮記であらう。その景色を寫して、

『蓮華洞に至つて風光頓に改まつたが、入り口の丘陵・村家・秋葉・樹林そのまゝ田中頼璋畫風の光景である。三山澗の溪流を登れば、一歩一歩に趣を加へて行く。此山徑の最急坂といふ磴段を登り終れば、右方眼下に平原を俯瞰し、東林・西林の二寺を望み得べしとの事なるも、濃霧の爲に少しの展望もない。既にして千仞の巨巖嶒立して天地を貫くとも思はるゝ勢を爲せる中腹を過ぐるのであるが、これは山内多門式の畫圖である。轎夫にその名を問へば天池峯といふ。小天池の裏面であらう』。

と記すが如き、實に仙境の妙を語つて餘りある。不幸博士は山中に七日も降り續けられた雨に毎日毎日、こぼした事ばかり書かれてゐるが、此處は元來煙に緣有る名勝地で、蘇東坡が悟道の句にも、『廬山煙雨浙江潮、不到千万恨未消、到得還來無別事、廬山煙雨浙江潮』とあるほどであるから、せめて雨の景に悟得の工夫でも凝らせばよかつたにと惜しまれてならぬ。然しどんな畫伯が幾人寄つても此の絶景を寫すことは出來ないだらうやうに、予も曾て金剛山榆岾寺の板間にうつら〳〵一夜を明して海金剛に下る半途、小雨大雨の降りつ止みつする八月半の午後、新金剛の十二瀑を濃霧の晴れ間に手に取る如く瞰下した事があるが、まあ斯樣な絶景にでも比較すべきものだらうかと想像してゐる。迚も多門式の平面畫では妙趣の百分一も浮いて來ない。殊に廬山では西林寺近く博士は慧遠の塔を發見して、千五百年後の今日まで德化を垂れた祖師その人に邂逅したやうな氣分を味ひ得たと云ふが、惜しい哉、その塔の形式が餘り畧圖であるため、八角か十角か十二角か又はそれ以上かさへ判然せず、そのプランを知り得ないのは如何にも遺憾である。

終りに南京で有名なは江南唯一の名塔たる攝山棲霞寺の五層八角石塔である。之は『攝山志』に、『塔は白石を以て之を爲し、高さ數丈、凡そ五級、錐琢天然種々奇絶』ともある通り白い雲水石の彫刻らしい。照相のみではよく解らないけれども、釋迦八相や四天王やその他色々の裝飾的彫刻も表はれてゐるやうで、中唐の風は餘り見られない樣に思ふ。寧ろそれ以前のものと云ふ方が當るかも知れない。京城の圓覺寺址の十三層石塔は博士も見られてゐる筈であるのに、何故彼の名塔と比較論及して與れなかつたのだ

らう。年代の新らしい爲めでもあらうが、建築意匠の均齊美と纖細明緻な彫刻に富むと、最も完全に近く保存されてゐるとの點から見れば、圓覺寺の塔は決して棲霞寺のそれに劣るものではない。彼の塔は實にパゴダ公園の名に恥ぢざる逸物である。彼此何れも大理石で、同じ位の高さで、隨處に彫刻を有する點に於て是非較照研究の價値があると思ふ。何れは純眞の信仰が心の內部から溢れ出て、自ら莊嚴崇高の形式美にリアライズされたものに違ひなからう。

こんな蛇足を喋々してゐれば限りはない。予は此の書を精讀し畢つて、吾等に人間のレゾンデートルを示し、ライフの目的を表はし、我等の運命を輝かして人生の東道たるべき純眞の藝術を味つた時と同じ感じを陶然と味はう事の出來たのを著者博士に深く感謝せねばならぬ。此の書が如何にシステマチックに出來てゐるかは、前後に附した緒言と巡禮行の成績たる發見、探求、紹介、藏經、儒道、佛道混交、蹈査、藝術、希望等を以て見ても一見瞭かである。元より專門學者に提供せんとの目的ではないのであるから、多少彼此の批評をする人もあるけれども、それは中學生がカントを評するに等しい。支那佛蹟調査の書としては、松本博士の『支那佛教遺物』出でゝより以來の大作で、敢て兩者を最近支那佛教資料書の双璧と申してよい。我々の社會の文化生活が近き將來に於て、斯る種類の名著を歡迎愛讀するほどに高上せんことの一日も速からんを望んで已まない次第である。(書中、伽藍殿觀等の平面圖を叮嚀に挿入されたは結構であるが、あれを鳥瞰圖と言ふのは果してどうでせうか。バードアーイヴュと言はんより寧ろプランに近いものでせう)。

東京、金尾文淵堂發行。定價八圓。(手島文書)

古事記及び日本書紀の新研究

津田左右吉著

本書題して「古事記及び日本書紀の新研究」といふが記紀の研究に於いて其の重要なる部分を占むべき所謂神代史に就いては既に著者の著書「神代史の新しい研究」があるため本書からは省かれ、又下の時代に於いては仲哀天皇(及び神功皇后)以前の部分に限られて居る。精密にいへば本書は卽ち記紀の一般的性質と其の神武天皇以後仲哀天皇(及び神功皇后)以前の部分とに對する研究である。著者は何故にこの時代を以つて其の研究の下限として居るかといふに之は古事記に於いて仲哀天皇以前のものは概して說話的色彩が強く歷史的事實として信ずべからざる不合理のことが多いからである。

今この記紀を上代史の資料として取扱ふには先づ之れが如何なる意味に於いて可能であり、又それに如何の價値があるかを明にしてかゝらねばならん、之れには記紀の內容の一々についての批判がいる、といふのが著者の見解である。

著者はかゝる見地から記紀の本文そのものゝ中に現れたる記述の前後矛盾及び同じ時代の同じ物語が記紀の二書に於いて種々の違つた形を以つて現はされてゐることを比較對照し記紀の叙述の不合理性不確實性を見、記紀の記事の多くを合理的史實として解釋する傳統的の觀方を排し、仲哀天皇を溯るに從て說話的色彩が愈強くなるとし、此等の記紀の記載はこれを史實として見るべき